

2. 中高生ボランティア活動の概況

1) 5.3.1 教育改革と中高生ボランティア

本節では、行政の主導によりボランティア活動を制度化した「5.3.1 教育改革」の具体的な内容と、中高生ボランティアの支援体制について述べる。

学校教育へのボランティア活動の導入は、日本でも議論されており、反対の声も多い。例えば、教育改革国民会議¹⁾の提案による「奉仕活動の義務化」に対して、日本ボランティア学習協会では「奉仕」という言葉は自己犠牲的イメージが強く、ボランティア活動が持つ「互助的精神」や活動者とサービスの受け手との間の「双方向的」で「共生的」な関係や「相互学習的」な関係にゆがみを産む危険があり、今日の水準にふさわしくないという意見を発表した。

では、なぜ韓国では学校教育において、ボランティア活動を制度化したのか。ボランティア活動導入の背景は何であろうか。金容熙(1997)は制度化が要求される社会的な背景があるとし、ボランティアをする側の背景として 余暇時間の増大、 現代社会特有の疎外感・孤立感から、交流や心理的な充足感を得たいという気持ちが高まっていること、

様々な福祉問題を社会問題、自分自身の問題として捉える意識が高まっていることを挙げている。そして、ボランティアをされる側の背景としては、福祉的ニードを挙げている。また韓国青少年開発院(1995)²⁾は、青少年問題が一般化、質的悪化、多様化しており、これらは青少年自身の問題というより、社会を反映したものであると言い、このような状況を改善するため、政府は文化観光部を中心に、青少年団体と協力して、道徳性の回復のために努力し、ボランティア活動の推進を行ってきた。しかし、それほど成果はなかった。こうした流れの中で、青少年の人間性と共同体意識を養うこと等を目的とした新しい教育政策を提示したのである。

次に、この教育改革に対して、韓国内でどのような反応があるのか見てみよう。「多様な社会問題が生じている最近、ボランティア活動への関心は高まっている。社会問題を国家や地方自治団体の責任だけに任せるには限界があることを認識し、民間団体や企業、地域住民には自発的な活動への積極的な参加が要請されている。このような情勢の中、中高生を対象としたボランティア活動の制度化は大変意義のあることだと言える(丁玉熙、2001)」他に、「最近、中高生には20時間を、高校生には60時間を義務的に卒業するまでボランティア活動に参加することを規定している。生徒に義務的にボランティア活動に参加させるという批判もあるが、ボランティア活動をさせるということは、畑に種を植え

るという原理と同じだ。(金範洙、2001)」など、筆者が調査した限りにおいては韓国では批判の声は少ないようである。金範洙と同様の見解は、聞き取り調査においてもよく耳にした。

教育部による1995年の「5.31教育改革」措置³により、韓国の中高等学校の教育制度は「体験的なボランティア活動を通じた学習」に転換する転機を迎えたと言われている。確かにこの改革後、中高生のボランティア活動への参加率は大幅に増加する。統計庁による資料で、ボランティアが制度化される前の1991年と制度化された後の1999年のボランティア活動への参加率を比較してみると次のようになる。

< - 2表：中高生のボランティア活動への参加率の変化> (%)

	1999年	1991年
合計	13.0	5.4
男	12.2	5.9
女	13.8	4.9
年齢別		
15～19歳	33.8	3.7
20～29	7.8	4.4
30～39	13.2	5.9
40～49	13.0	7.9
50～59	10.8	6.1
60歳以上	6.7	3.8

備考：統計庁(1991、1999)より筆者が作成。

- 2表を見ると、91年から99年の間に韓国全体でボランティア活動への参加率が高くなっている。特に、制度化の影響を直接的に受けた15～19歳、つまり中高生は91年には参加率が全世代の中で最も低かったにもかかわらず、99年には最も高くなっていることが分かる。

1996年には各市・道の教育庁(教育委員会)がボランティアの年間活動基準を定めた。ソウル特別市の場合、98年度から、つまり中学生の場合は95年度新入生から、進学時に内申書に記載されているボランティア活動の成績が反映することになった。内申総点200点中、9%(=18点：学年当たり最高6点)をボランティア活動が占める。活動の評価は次のように、大きく5つに分けられる。中学生の場合はボランティア活動の目標設定、実践計画、実践、目標達成の確認、ボランティア活動の評価などである⁴。また活動評価の基準となる点数は次の通りである。

< - 3表：ボランティア活動の評価の基準指数（毎学年当） >

区分	活動時間	点数
年間	50時間以上	優（5点）
	40 - 49時間	秀（4点）
	30 - 39時間	美（3点）
	20 - 29時間	良（2点）
	19時間以下	可（1点）

出著：教育部（1996）「ボランティア活動の指針」

- 3表を見て分かるように、評価は実際には活動時間数で決められ、一生懸命取り組んだ生徒には、毎学年当たり1点を加算することができるようになっている。

中高生のボランティア活動を支援する組織として、青少年ボランティアセンターが挙げられる。文化観光部が、青少年によるボランティア活動を支援するため、1995年に韓国青少年団体協議会内に青少年ボランティアセンターを設置し、96年に本格的に稼動した。これが韓国の中高生ボランティア活動に関する中央センターの役割を果たしている。さらに、この中央センターを中心として各市・道に地方青少年ボランティアセンターが置かれ、相互に情報交換、活動プログラムの開発と普及などの業務を行っている。全国の市・区・郡・区すべての地方自治体でもボランティア申請窓口を開設する動きがあり、特にソウル市では97年から、全ての区庁で開設された。また既存の青少年団体や施設でも中高生ボランティア活動を支援している。だが、上記のような政府支援の機関や民間機関に共通して言えることは、朴静美（1999）によると、社会福祉やボランティア活動について専門的な知識のある人材の不足により、ボランティアの管理が形式化している、機関間の連携が弱い、情報交換や交流がほとんど行われていない等である。

2) 中高生ボランティアの特徴と活動の実態

次に、中高生ボランティアの実際について、主に統計庁（2000）の統計資料を用いながら、具体的に述べたい。では、まず中高生たちがどの程度、社会団体に参加しているのか見てみよう。

< - 4表：社会団体への参加率 > (%)

	参加者	宗教団体	ボランティア団体	参加しない
合計	23.1	19.0	7.5	76.9
15～19歳	11.5	26.4	21.6	88.5
20～29歳	22.6	15.0	5.2	77.4

備考：統計庁（2000）より筆者作成。

ここでいう宗教団体とは統計庁によれば、宣教会、慈悲院、教理研究会等のことである。

- 4表の15～19歳を中高生、20～29歳を大学生とすると、中高生の社会団体への参加率は平均より低いにも関わらず、ボランティア団体や宗教団体に参加している人は2割以上と大学生に比べ、かなり多いことが読み取れる。ここで宗教団体を挙げたのは、韓国では「宗教団体を通じてボランティア活動を行っている人が多い」という調査が多いからである。筆者が行ったアンケート調査においても同様の結果が見られ、ボランティア21（1999）の調査⁵でも、過去1年間に宗教機関でのボランティア活動をした人は34.4%と他の機関を大きく上回り、最高となっている。また< - 7図：「教会・宗教団体に参加している」割合と「慈善団体に参加している」割合 > 参照のこと。

では、ボランティア参加者は具体的にはどのような分野で活動しているのだろうか。以下の表を見てみよう。

< - 5表：ボランティア参加率と活動分野 > (%)

	参加率	地域の環境保全	福祉施設関連	災害地域支援	その他
合計	13.0	40.1	34.2	8.7	11.8
15～19歳	33.8	42.4	45.3	4.9	14.6
20～29歳	7.8	19.4	45.2	13.6	23.6

備考：統計庁（2000）より筆者作成。

他に「国家や地域の行事への参加」、「子どもの教育関連」の選択肢がは省略した。（複数回答）

- 5表から分かることは、中高生は主に、地域の環境保全（42.4%）や福祉施設関連（45.3%）の分野で活動しているということである。また1996年6月27日に

設立された青少年ボランティアセンターの資料によれば、設立後1年間にセンターで事前教育を受け、現場に配置された中高生のうち、42%が文化・芸術施設で活動した。その次に公共機関、社会福祉施設・機関、宗教・社会団体と続く。活動内容を見ると、業務等の手伝い37.3%、地域の環境美化や行事支援21.7%、自然環境や文化財の保護に関する活動15.7%、キャンペーン活動10.8%、その他14.5%である。実際にどのような活動を行っているかと言えば、ゴミ拾いなどの単純作業や1回限りの活動も多く、ボランティアに対する興味を失わせている(丁玉熙、2001)¹と言う。しかし、丁玉熙のこの見解に対して、筆者はゴミ拾い等の単純労働が単にボランティアへの興味を失わせているのではないと考える。なぜなら、同じ体験であっても、しなければならぬものとして与えられて取り組むのと、自ら課題意識を持って取り組むのとでは全く効果が異なるからである。

では中高生たちはいつ活動しているのか。先行調査・研究によれば、大部分が長期休暇中に活動しており、学期途中に持続した活動することはほとんどないようだ。これは時間的な余裕がない、あるいはボランティア活動が学習に支障をきたす恐れがあると、中高生自身も親も避けている⁶からのようである。つまり成績のために、活動時間を増やすだけの活動が多く行われていることがうかがえる。

チョ・ウンジュ(1999)⁷は、中高生ボランティアについて次のように述べている。中高生のときは自発的というより、集合的で消極的な活動であるが、この時期の活動経験が、大学でのボランティア参加に与える影響は大変大きい。この見解から、韓国では中高生ボランティア活動が集合的に行われている、つまり主体的ではなく、個人の希望に基づいて行われていないのではないかと推測できる。また大学でのボランティア活動に与える影響が大きいという点に関しては、章でアンケート分析結果を用いて検証していきたい。

最後に、筆者が実際に見た中高生ボランティアの活動例を二つ挙げたい。この二つの例は、中高生ボランティアの代表的な姿を表しており、その特徴と制度化による問題点がはっきりと読み取れる。

筆者が見た中高生のボランティア活動の現場 :

2001年3月初旬、筆者がボランティアとして1週間程住み込んでいたU障害児施設で。いつもは筆者と保育スタッフが交代で皿洗いを行っていた。その日は日曜日でちょうど昼食が終わった頃、一人の女子中学生がやって来た。

スタッフ「ボランティアの人ですか？こんにちは」

中学生「こんにちは。何をやればいいですか？」

スタッフ「ここの皿洗い、お願いするわ。」

彼女は皿洗いを始めた。筆者は手伝おうとしたが、

スタッフ「和美さんはやらなくていいよ、彼女は学校から行くように言われて、来ているんだから。」と言う。子ども達数人の食器は結構な量だが、一人で黙々と全部片付けると

「終わりました。」と言って、そのまま帰っていった。彼女はU施設に来て、ボランティア担当者にサインをもらい、一人で皿洗いをして、他の誰とも話をせず、子ども達と交流することもなく帰った。スタッフによれば、周辺の中学生在がよくボランティア活動のために来るそうで、いつも皿洗いやそうじをしてもらっていると言う。

筆者が見た中高生ボランティア活動の現場 :

2001年3月中旬、I 児童福祉館で。この児童福祉館には、地域の子どものために児童図書室がある。登録すれば誰でも本を借りることができ、図書室で読むだけなら登録の必要はない。毎日夕方になると、たくさん子ども達（主に、幼児・小学生）がやってきて、本を読んでいる。この図書館のスタッフは地元の高校生数人がボランティアで交代で行っている。私が滞在していた1週間、毎日必ず誰かが来ていた。彼らは学校が終わると、すぐ福祉館に来る。そしてまず職員に出席の印をもらう。何度も来ているので、職員全員と顔見知りだ。その後、図書室で高校生司書として本の貸し出しや返却、本の整理をしたり、幼児や小学生の相手をしたりする。本を乱暴に扱っている子どもに大声で怒る様子を目撃したこともある。閉館時間になると、福祉館の職員に挨拶をし、活動は終了である。

以上の二つの例から分かる、韓国における中高生ボランティアの特徴と課題は第 4 章で述べたいと思う。

(注)

- ¹ 教育改革国民会議は2000年3月に首相の諮問機関として発足し、現在の教育制度の在り方について議論している。
- ² 青少年開発院(1995):「教育改革と青少年育成政策」
- ³ 「5.31教育改革」の指針(出著:現文化観光部『青少年白書1995』): 青少年のボランティア活動を単位制にするか、ボランティア活動の内容と参加時間を「総合記録部」に記録・管理することを義務付け、進学時、反映されるようにすること。(国公立大の場合は参考資料とし、私立大の場合も参考にすることを推奨する)1996年から「総合生活記録部」を作成し、97年の入試から進学時、学生選抜資料として反映されるようにすること。従って、現在の高校2学年から従来の生活記録部と並行して、「総合生活記録部」が入試に使用され、1999年からは新「総合生活記録部」を全面的に使用する。 青少年ボランティア活動のための時間、空間、プログラムなどの要件を大幅に調整・支援すること。 家庭、学校、社会の共同連帯を強化すること。 地域別「青少年ボランティアセンター」(文化観光部設置)を通じ、プログラムへの参加及び機会の拡大(長期休暇の活用) ボランティア活動の記録維持のために学校と福祉施設そして青少年団体間の協力体制を構成し、 実践中心で、人間性を育てる教育を全教科に反映するよう強化すること。 青少年のグループ活動及びボランティア活動の関連部署(総理室青少年担当部署、文化観光部青少年政策室、教育部教育政策室、保健福祉部、労働部など)が協議、青少年の総合計画を樹立し、予算の効率的な活用すること等。
- ⁴ 教育部(1996):「ボランティア活動の指針」
- ⁵ ボランティア21(1999)の調査は満20歳以上の人を対象にしたものだが、過去1年間に宗教機関でボランティア活動をした人は34.4%と、社会福祉機関23.9%、市民団体11.2%等を大きく上回っている。
- ⁶ 前掲書、「第7章 児童及び青少年ボランティア」pp. 179。
- ⁷ チョ・ウンジュ(1999): 環園大学大学院修士論文「大学生ボランティアに対する実態及び認識調査」